

スワン夫人の肖像

——多様性の背後——

清 家

浩*

小説の中では意外な事が起こる。時の経過が想像だにできなかった事態をもたらすのだとも言えるし、逆に、予想しえなかった状況の現前がその間に流れた時を強く印象づけるのだとも言いうる。『スワンの恋』の最後で、スワンが、「生涯の何年かを台無しにしてしまったなんて、死のうとまで思ったなんて、一番大きな恋をしたなんて、自分の気に入りもせず、好みのタイプでもなかった女のために。」¹⁾と述懐して、嫉妬に苦悩した恋から完全に解放されたかに見える時、次のパートで、彼の結婚した相手がまさしく彼と縁が切れたはずの当の女性と知らされる読者は、その意外性とイロニーに、一瞬、たじろぐのではあるまいか。女の懇願と二人の間に生まれた子供への愛情からと説明はされても、本心から女を自分のもとに引きとめておきたいと思った時にかなわず、愛が消えた時に成就する運命は、勿論、そこにはプルースト一流の箴言が付けられるのだが（「因果律の働きは、結局、可能なほとんどすべての結果を生ぜしめる。もっともありえないと思われていたものまでを。」I462）、人生の皮肉を感じさせずにはおかない。こうして、コンプレの隣人スワン、社交人スワン、恋に苦悩するスワンに、オデットの夫＝ジルベルトの父という新しい人格がつけ加わり、スワンの生活と価値観に変化がもたらされる。

願う時に実現しなかったスワンに比べ、話者の願望はまだしも幸福な展開をみるというべき

であろうか。一瞬、コンプレに姿を見せたスワンの娘と、話者はパリのシャン・ゼリゼ公園で共に遊ぶ仲になる。この初恋は話者の片思いで終わることになるとはいえ、ジルベルトとの交際は彼をスワン家の内部へと招き入れる。かつて、彼女がシャン・ゼリゼへ来ない時、話者は、聖地へ向かう巡礼のごとくに、スワン家周辺をうろついたものだ（I409）。そして、犬を散歩させるスワン家の下男を見るだけで、お供のフランソワーズに「どうなさいました」と問われるほどに感動するありさまである。また、大抵の場合、彼はブローニュの散歩道へと向かった。そこでは、モードの先端に行く優雅な装いのスワン夫人が馬車を降り悠然と歩んでくる。話者は彼女がジルベルト自身であるかのように感動に身を震わせて彼女を待つ。こうした情景で『失われた時を求めて』の第一編が閉じられ、続く第二編『花咲く乙女たちのかげに』の章では、話者は、もはや、初恋の対象を外側から見るのではなく、その眩暈の中心部に入りこんでいる。ジルベルトの愛を得たというのではない。彼は文字通りスワン家の奥深くへ参入したのである。「それまで閉ざされていた通路があらゆる予期に反して眼前に開かれた妖精の土地。」（I499）、「私が迎え入れられた王国はそれ自身、スワン夫妻が超自然な生活を送るさらに一層神秘的な王国に含まれていた。」（Ibid）彼は今や外部にあってスワン夫人を待つのではない。夫人とともにいて王国の一員となっている。

ところで、話者の生のアプランティサージュの出发点にあって、彼をコンプレの少年からパ

* 広島経済大学経済学部教授

リの若者へ脱皮させるこのスワン夫人は、どのようにして現在の境遇に達したのか。話者が直接知ることはなかった変貌してやまないこの人物の生涯の前史をここでたどり直してみる、それが本論の目的である。

1. コンプレのオデット

「さあ、ジルベルト、いらっしゃい。何をしてくれるの。」という甲高い威圧的な呼び声がタンソンヴィルのスワン家の庭に響く (I.140)。スワン夫人の初登場の場面である。次章でふれるが、パリの大叔父の家でバラ色服姿の彼女にすでに会ったことがあるとはいえ、当時、「私」は女が何者かわからないままであった。こうして、事実上、初めてスワン夫人として登場したオデット・ド・スワンは、しかし、娘の名前がジルベルトであることを伝える以上の存在ではない。「私」の関心のすべては、不意に出会った少女の上にのみとどまっていて、背後からこの光景に君臨する母親や、そのかたわらに立つ、目からとび出さんばかりの異様な視線が「私」を見つめる男の存在など眼中にない。突如芽生えた美少女への思慕で少年の心は一杯なのである。話者の存在に占めるスワン夫人の割合はゼロであり、その口からでた音の響きだけが余韻を残している。

「私」が息をひそめて遠ざかる少女を見つめている横で、祖父がつぶやく。「あのかわいそうなスワン。奴らは何てひどい役を彼に演じさせているのか。あの女とシャルリュスは二人きりになるためにスワンをどこかに出発させたんだ。確かにあいつだ。私は彼だとわかった。それに、小さな娘までがこんな恥さらしに巻きこまれて！」(Ibid.) こうして、少年の純粋に夢想的な世界のかたわらに、コンプレという世間の現実世界が置かれる。コンプレの人から見れば、スワン夫人は愛人をつくって夫をあざむいているのである。この場面は、したがって、少年の初

恋の発端を語るとともに、コンプレの噂を一方で確証しているのである。

早くに、幼少の話者の「就寝の悲劇」のところで、すでに、スワンの結婚は一個のスキャンダルとして語られていた。スワンは、「最下等の社交界の女、ほとんど娼婦 *une femme de la pire société, presque une cocotte*」(I.20) と結婚したのであり、父が株式仲買人の物堅いブルジョワの男は(彼のパリ社交界でのかくかくたる地位もコンプレでは響きものであった)、要するに、悪い意味で身分違いの結婚をしてしまったのである。彼の妻を招待するコンプレの家庭は一軒たりとて無く、当のスワンも妻をコンプレの社会に紹介しようとは決してしていない。父の代から親交のある話者の家を訪れる際も常に一人である。そして、スワンがやつれた面差しを見せれば、それは、妻の不行跡に対する気苦労と解釈される。「スワンはあのいかげんしい女のせいで苦労が多いんだと思うわ。何かシャルリュスとかいう男と暮らしてるってことはコンプレ中が知るところだわ。」(I.34) 大叔母のセリフ中のシャルリュスの名前は、祖父も発したものだが、彼らの隣人サズラ夫人も口にしてはいる(「スワンの奥さんが口紅をつけるのは、旦那に気に入られようっていうんじゃないくて、シャルリュスさんのためなんだわ。」I.98)。コンプレでは、スワンは妻に間男されるかわいそうな男であって、妻の愛人の名はシャルリュス某という。タンソンヴィルの庭の場面は、結婚当初からコンプレに流布するスワン夫人の不倫を裏書きするエピソードでもある。

しかし、パリで洒落たアパートマンに住み、気ままな暮らしを楽しむスワン夫人が何のためにコンプレなどという田舎へ来るのであろうか。愛人と逢引するのに、わざわざ田舎の夫の地所を選ぶというのはいかにも不自然である。本当に、男と妻がたくらんで、スワンをどこかへ行かせているのだろうか。では、妻子と男を家に

において、スワンはどこで何をしているというのか。先ずは、夫人よりもスワン自身の行動を説明する必要がある。作者のアンリ・ゲオン宛書簡によれば、「スワンがお人好しにも愛人をシャルリュス氏に預ける時、読者は、シャルリュスがスワンを騙していると思います。ところで、事実は全くそうではないのです。シャルリュス氏は昔からのホモセクシャルであり、……中学時代彼に愛されたスワンは、彼にオデットを委ねても何ら危険はないことを承知しています。』²⁾ こう作者から説明されてみれば、シャルリュスとスワン夫人が夫のいない場所に二人でいたからといって、不倫目当てと考えることはできない。オデット無しでいられないスワンがオデットと一緒にいることができない時、かわりに、シャルリュスに彼女の相手をしてもらう『スワンの恋』以来の習慣が³⁾、ただ単に今も続いていると考えるべきであろうか。

ところで、『スワンの恋』を締めくくる最後の夢をみた翌朝のスワンの行動を見てみると、彼が本当にオデットから離れて次の愛へ移っていく様子がわかる。彼は朝早くから呼びつけた理髪師に刈りあげた髪が乱れないよう注意を与えているのだが (I.375), 「刈りあげた髪を軽くカールさせる」《un léger crêpelage ajouté à la brosse de ses cheveux》(I.192) この行為こそは、その時々々の愛人のもとへ通う時のスワンの習慣だった。オデットとの恋に終止符を打ち、今、彼は新しい女性のもとへ出かけようとしているのである。その女性とは、カンブルメール若夫人、コンブレの住人ルグランダンの妹である。オデットとの恋愛期間中、スワンがコンブレを訪れることは決してなかった。彼の心がオデットを離れた今、彼はかつてのスワンにもどって、女の周りを旋回し始める。朝早くに理髪師を呼んだのは、女が数日の予定でコンブレに滞在する情報を得て、話者の祖父に、明日の午後コンブレに行くと知らせていたからでもあ

る⁴⁾。女好きのスワンは魅力を感じた女とねんごろになるためには手段を選ばなかった。上流社交界であれば、紹介してもらうのに何の問題もなかった。そうでなければ、彼は、臆面もなく、誰彼かまわず取り持ち役を巧みに無理強いするのであった。こうして、唐突に結ばれたスワンとの一時的な親交は、彼の恋愛が終ればこれまた唐突に終わる。利用されるだけ利用された後は、スワンから何の音沙汰もない。話者の祖父はスワンから手紙を受け取るたびに言ったものだ。「スワンが何かを頼んできたぞ。ご用心！」(I.190) と。オデットとの恋が続いていた間途絶えていたこれらの習慣は復活した。カンブルメール夫人が実家へ帰るたびに、当然、スワンはコンブレにやって来るのではあるまいか。話者の記憶に残る、スワンがおずおずと裏木戸を押して話者の家へ一人でやってくる宵々、実は、外観に反して、スワンは不幸ではなかったのではないか。

話者が生まれる前に起こったスワンとオデットの恋の物語は、第3者に聞かされ3人称体で語られた、話者の生きる現実からは切り離された独立した話のように見えながら、こうして、冒頭のコンブレの世界へ直接つながっていた。オデットからカンブルメール夫人に心を移したスワンは、機会が訪れると、女の魅力と田舎の魅力を同時に味わい、旧友宅も訪問できるコンブレへ舞いもどっていたのである。話者の母と祖父は直観的にこうしたスワンの本心を見抜いていた節がある。前出の大叔母の言葉に二人は反論する。スワンは以前ほど悲しげな様子をしていない。第一、例の苦悩のポーズ(額に手をやり鼻眼鏡のレンズを拭うスワン父子に共通の仕草)をもはやしない。妻を愛していないことはずっと以前に受け取った手紙からも明らかだ、云々 (I.34)。スワンが妻をコンブレの人々に紹介せず一人でやってくるのは、むしろ、行動の自由を確保するためではないか。娘が成長して、

話者同様、復活祭の休暇など、家族でパリからやってきてコンブレに滞在する時、妻と娘をタンソンヴィルに置いたまま自分は愛人に会いに行くためには、シャルリュスは恰好の隠れみのであった。馬鹿な結婚をして妻に裏切られる不幸な男として同情され、幾分さげすまれることは、スワンにとって決して不本意なことではなく、むしろ、計算に合ったことである。スワンには妻への愛情は無く、別に愛人を作っていることを承知の祖父でさえも、タンソンヴィルでジルベルトと一緒にシャルリュスとオデットを見た日、「あのかawaiiそうなスワン。奴らは何てひどい役を彼に演じさせているのか。」と憤慨させるほどに、スワンの作戦は完璧に成功していると言えるのである。スワンがパリへ出発した⁵⁾のは、妻とシャルリュスに騙された結果のことではなく、パリで、誰か別な女に会うために自分が仕組んだことではないのか。コンブレの住人は事態の表面だけを見て、ナイーヴな解釈をくだしていたのである。

村人の目は誤魔化せても、では、はたして、妻オデットの目は誤魔化せたのであろうか。

いつか愛さなくなった時には、味あわされた苦悩、傷つけられた自尊心の復讐をしてやろうと心に決めていなかった訳ではないスワンも、いざ現実に愛を感じなくなった時には、もう愛してないことをオデットに見せつける願望そのものが消えはてている。スワンへの熱が冷めた時にオデットが彼に対してとったような態度を、スワンはオデットに対してとらない。別の女に関心があることを示して、かつての憂さを晴らすどころか、新しい恋愛を悟られないよう、彼は千の注意を払うのである (I.516)。この新しい愛、即ち、カンブルメール侯爵夫人への愛は、実際、オデットに気づかれなかった。オデットが話者にヴァントゥイユのソナタを弾いてみせる時、思わず、スワンがカンブルメール夫人の名前を口にする。それどころか、彼が夫人とプ

ローニュの高級レストラン「アルムノンヴィル」へ食事をしに行くことさえ漏らされるのだが、オデットの反応は、話者に対して「シャルルに首ったけだったと言われている夫人よ」と無邪気に言い放つだけなのである (I.525)。

スワンは新しい恋を隠しおおせた。コンブレを再び訪れるようになった動機は知られることなく、妻に騙される哀れな男のイメージのもとにカムフラージュされる。騙されているのは夫スワンではなく、実は、妻オデットの方だったのである。

2. ココットとしてのオデット

バラ色服の夫人

タンソンヴィルのジルベルトの母オデットは「白い服の夫人 Dame en blanc」と記述される以外何の描写もない。スワン家の庭にいるからスワン夫人と知られるだけで、「ジルベルト」の名を発するだけの役回りである。それにひきかえ、「バラ色服の夫人 Dame en rose」としてのオデットは一個のエピソードの中でより詳細に描写されている⁶⁾。

中学生となった話者は演劇熱が高じて大叔父アドルフのもとを訪れる。大叔父には女優やココット（高級娼婦）の知合いがいて、一族の女性にそうした女たちを紹介するとか、一族に伝わる宝石類をくれてやるとか、とかく不謹慎な行為で悶着を起こしていることを話者は知っている。又、ある女優の名が出てくると、父が母に「君のおじさんの友達だ」と言うのを耳にしたこともある。話者が、彼のところへ行けば、通常ならそばへ寄ることさえ難しい女優にでも簡単に紹介してもらえんことを考えても不思議はなかったのである。そこで、不意に訪れた大叔父の家で、彼はどんな人物に出くわすのか。玄関先の赤いカーネーションを挿した二頭立ての馬と御者がすでにどんな種類の来客かを告げている。少年が呼鈴を押す。すると、声が止み、奇

妙なことに、扉が次々に閉められていく。まるで、内部にいる客は誰かに追われている身であるかのように。結局、明らかに、少年は招かれざる客である。ようやく部屋に招じ入れられた少年がそこに見出したのは、真珠の首飾りをつけ、バラ色の絹のドレスに身を包んだ夫人である。名前はわからない。大叔父は、未成年者に女性を紹介して新たないさかいの種をまくことを恐れたか、二人に互いの名前を一切伝えないのである。しかし、話者の目に映るその婦人には、女優らしいところ、普通の女性と違うところは全く見えない。今、みかんを食べ終えた女は、親戚中でも美しい部類の女たち、例えば、正月に訪問するいとこの娘とどこが違うだろう。「生き生きした善良そうなまなざし」「率直で愛嬌のある様子」、少年の母や父を知っているかのような話しぶり。写真で見る女優たちの蠱惑的なおもかげはどこにあるのか。眼前の現実の彼女を見る限り、女が別世界の存在であることを示すものは何もない。カーネーションを飾った二頭立ての馬車、シックなバラ色の服、大粒の真珠の首飾りに加えて、大叔父が交際するのは最高級のココットだけだという予備知識がなければ、少年は、この女性をココットと取ることはできなかったろう。「私は軽い失望を感じていた。」(I.76) こんな普通でまともな女に馬車や宝石を与えたいくなく暮しをさせて財産を食いつぶす富豪の気が知れない。少年はそう思う。彼が婦人の手に吸い寄せられるようにしてくちづけするのは、抑えがたい衝動のせいでもあるが、小説の構成面から考えると、それは、むしろ、女のセリフを導き出すきっかけとしての意味の方が大きいように思われる。女は言う。「将来は完璧なジェントルマンだわ。」《Ce sera un parfait gentleman.》、「一度お茶を飲みにいってしゃれないかしら。」《Est-ce qu'il ne pourrait pas venir une fois prendre a cup of tea?》(I.77. 下線は筆者)。この英語の使用こそはオデットの

ライト・モチーフであって⁷⁾、名指されることのないこの女が実はオデットであることを明白に示している。ただし、主人公の少年は結局女が何者か知らないままである。大叔父の客がスワン夫人だったことを彼が知るのは、大叔父の死後にもたらされた女優達の写真を見てのことである⁸⁾。

ところで、話者の幼少期にスワンの不幸な結婚が取り沙汰されている以上、この「バラ色服の婦人」のエピソードの時期にも、オデットは当然スワン夫人のはずである。オデットは旧知の男友達のところへ夫の目を盗んで通っているのであろうか。呼鈴の音で扉が閉められていくのはなぜか？大叔父は甥の息子の訪問に困惑している。来てくれないことに不満を漏らすほど可愛がっている少年に早く消えてもらいたがっている。相手の女性は堂々と同席させえない身分の女なのか。アドルフは女と二人きりになって二人だけの秘密の問題を早く片付けたいのか。相手がスワン夫人であって日常の訪問であればそこまで逃げ隠れする必要はないのではあるまいか。少年が失望を感じるほどに女の印象はまともで普通の女性である。笑って気軽に共に時間を過ごせないのか。この一件は家で話さないようにと少年に仄めかすアドルフは何を考えているのか。この出来事を巡って、話者の父や祖父はアドルフをきびしく責め、結局、彼とコンプレの親戚は交際を断つ。それ故、コンプレの大叔父の部屋は今も空っぽなのである。家人は、アドルフが子供とスワン夫人を引き合わせたから詰問するのではない。それが汚らわしいココットだと判断したからである。ここで言えるのは、スワン夫人となったオデットが未だにココットの部分を消し去っていないということである。

確かに、スワンとの結婚後、大方の予想に反して⁹⁾、オデットはやさしい妻となり平穏な家庭を築いてはいた。しかし、例えば、話者が

人々の羨望の視線を浴びながら、スワン夫人とブローニュを散歩していた時期、彼女はパリの電車の中で行きずりの青年に身を任せていなかったろうか。話者の先輩のこの青年ブロックは、「パリとボン＝デュ＝ジュールの間で、3度続けて、しかもこの上なく洗練された技巧で身を任せたプロの女」との情事を露骨に語って、その女とブローニュを散歩していた話者に女のアドレスを聞こうとしているのである (II.136)。

さらに、決定稿には現れないが、草稿中では、コタール医師がオデットと愛人関係にあって、オデットの結婚後もその関係は続いている。患者を待たせて抱き合った後、オデットがコタールに言うセリフ。「さあ、先生は病人たちに預けますわ。それに私も帰らなければなりません。シャルルが待ってますから。」¹⁰⁾

ココットの外観を示した「バラ色服の婦人」は、本質として、話者の思い込みによる幻覚でもなく、家人の見当違いでもなく、大叔父の当惑も偽装ではなく、富裕なブルジョワの女主人におさまったオデットの抜きがたいココット性を示しているのである。最先端のモードに身を包んでブローニュを散歩するスワン夫人は圧倒的な美と自信に満ちている。しかし、彼女の美に感嘆する人々の間からはこのような声も聞こえる。「マク＝マオンが辞任した日、俺は彼女と寝たんだ。」「そのことは彼女に思い出させない方がいいだろうぜ。彼女は今ではスワン夫人なんだ……」 (I.413)。が、その気遣いはいらない。彼女はいまだにココットのオデット・ド・クレシであることをやめてはいない。

ヴェルデュラン家

コタールが妻をあざむいてオデットとの関係を継続していたこと、そして、スワンの死後再婚してフォルシュヴィル夫人となったオデットが、時に娼婦として振舞っていたことが語られる前出の『見いだされた時』の草稿中では、又、

オデットをヴェルデュラン家へ紹介したのはコタール医師だとも明かされている¹¹⁾。コタールは毎回金を払って相手していたオデットを、後年、囲い者にして、いつでもヴェルデュラン家で会えるようにしていたのであろうか。

常連の忠誠を重視するヴェルデュラン夫人のサロンでは、相手に入れあげて集まりをすっばかさない限り、恋愛沙汰はまったく問題にされなかった。そして、夫人のサロン以外の社交界に関心を示した女性の常連たちが次々と放逐される一方で、オデットは夫人のサロンにとどまっていた。それどころか、オデットにとって、ヴェルデュラン家は自分の生活から絶対に切り離せない重要な場所であるようにさえ見える。スワンと知りあってスワンに恋したオデットは彼女の家を再三訪れる。その彼女がスワンに願うことは、彼女の方でも彼女の家にやってきて彼女のお茶を飲んでくれるということと、もうひとつは、彼女が毎晩訪れるヴェルデュラン家にスワンが紹介され、そこで二人が会うことなのである¹²⁾。

ヴェルデュラン家への紹介を依頼するスワンからの手紙を受け取った話者の祖父は、背後に女性が絡むことを易々と見抜いて、例の「ご用心、ご用心。A la garde! A la garde!」を発する (I.196)。こうして旧知の人物に取り持ちを頼むという事実が、スワンの心にオデットへの恋心とは言えないまでも関心が芽生えたことをうかがわせる。最初、肉体的に全く引かれなかった、むしろ嫌悪さえ感じた女が自身を愛するがままにさせていた間、彼の方が変わっていったのである。結局、スワンはオデットによってヴェルデュラン家に紹介される。常連がよそで愛人に会って欠席されるよりは家で逢引してくれる方が夫人にとっては好ましいことである以上、スワンは楽々と常連の仲間入りを果たすのである。

しかし、この恋の発端の経緯のどこを見ても、オデットが富裕なスワンの金を目当てに接近し

た痕跡は見当たらない。むしろ、彼女は、一途な純愛を彼に捧げているように見える。次にいつ会えるか不安げに哀願する様子や、昼でも夜でも都合のよい時に知らせてくれたらいつでも駆けつけるというセリフや、庭の菊を摘んで手渡す行為に何の駆け引きも感じられない。彼女はココットの片鱗を示すどころか、ついには、ポッティチェリに描かれた女性像と合致してしまう。ヴェルデュラン家では、ピアニストが、二人のために、ヴァントゥイユのソナタを演奏する。愛は高められ、二人の間にはいまだ肉体関係すらない。

スワンが恋の幸福に酔っている期間、しかし、オデットはどのように一日を過ごしていたのであろうか。スワンはヴェルデュラン家へオデットと一緒に行くことは決してなかった。それは、ヴェルデュラン家へ行く前、別な女を腕に抱くためであった (I.214-215)。スワンは宵の前半をふっくらしたバラのようなお針子娘と過ごし、後半をヴェルデュラン家でオデットと過ごすのであった。こうした二股をかけた愛の行動を、他方でオデットも取っていなかったという保証はない。スワンには愛されている確信があって、オデットの他の側面に目を向けないだけのことである。富裕なスワンはいざしらず、おしゃれなオデットがどのような手段で生活を維持しているというのか。スワンが通うオデットの住まいには他の男たちも通っていたと容易に想像できるのである。娼婦オデットを回想するブローニュの男は、「中国趣味にあふれた風変わりな家」《un petit hôtel très étrange avec des chinoiseries》(I.413) に言及していなかったであらうか。それは、まさしく、スワンが訪れたあの東洋趣味あふれる彼女の家に違いない (I.216-217)。実際、昼間のいつもと異なる時間に訪れて、スワン自身、別の誰かと鉢合わせしたこともある¹³⁾。

しかし、スワンの頭には自分が一個のココッ

トを相手にしているという考えは一切浮かばない。オデットに金品を与えるようになり事実上彼女を囲い者になっている状況となっても、彼には、その状況が女を囲うということだとの自覚はない (I.263)。最初から金で買える女という風に見ることがなく徐々に偶像化していった女性を金銭的な利害で測ることなど到底できなかったのである。嫉妬深いスワンに真相を告げる者としてなく、一通の匿名の手紙が事実を暴露するのみである¹⁴⁾。

オデットはスワンに次いでフォルシュヴィル伯爵をヴェルデュラン家に紹介する。いずれ、彼もまた、菊と東洋趣味で飾られたオデットの家を訪ねてくることになるだろう。夜の集いを決してすっぽかすことのない忠実な常連だったスワンも、やがてヴェルデュラン夫妻から疎まれ、出入りを禁じられ、こうして、ヴェルデュラン家はスワンの恋を妨害する場、オデットが他の男と自由に会う場になっていく。スワンがもう少し如才なく振舞うことができていれば常連でいることができたかもしれない。しかし、夫人に秘密を持つ者は放逐されるのがこのサロンの掟であった。そして、この場合は、オデットにとっては、自分の生活と快楽とを保証する男たちを巧みに飼育する生簀のようなものであったかもしれない。コタールは若い妻を欺いてオデットと関係を持っていた可能性がある。スワンと結婚する以前、このサロンに居続けている間、オデットは、どれだけの男を招き入れ、どれだけの男が去っていったのであろうか。『スワンの恋』の最もココットらしくない恋愛模様が展開するヴェルデュラン家の背後に見え隠れするものを、恋に目のくらんだスワンは見通せないままだったのである。

3. オデットの前歴

ミス・サクリパン

スワン夫人の過去の一時期、話者が生まれる

前のスワンとの恋の時代は、人づてに聞いた話を基に復元されたものである。語られなかった事実、あるいは、さらに以前のオデットの過去は、話者が生涯の折々に触れる偶然の機会を通してあきらかにされる以外方法はない。例えば、バルベック滞在中、話者はエルスチールのアトリエを訪れ1枚の水彩画に強く引かれる。それは、男か女か一見すると性別も定かでない男装した女優の絵で「ミス・サクリパン 1872年10月」と題されている。モデルの衣装や背景をなす細部の、絵としての芸術的独創性とは別に、そこには、変装した女優の本性が色濃く投影されている。即ち、変装した女優は、「役を演じる才能よりも、ある種の観客の快楽に麻痺したあるいは墮落した官能に訴える刺激的魅力の方が恐らく重要である」¹⁵⁾と考えているのであり、エルスチールは彼女のこの背徳的側面を際立たせようとした。モデルは挑発的なコスチュームに身を包み、女装した青年とも男装した女ともいづれにも取れる風情で、悩ましい表情を浮かべ、愛撫に身を任せようとしているかのようである。これはもう女優というより、ココットの図ではないのか。独創的な絵としてこの「ミス・サクリパン」を眺め、その魅力进行分析していた話者が、それからしばらく後、突然、一瞬のひらめきによって、モデルがオデットではないかと気づくのも不自然なことではない。その絵にはまさしくオデット的なものが現れていたのである。エルスチールは無言のままであったが、それは確かにスワンと結婚する以前のオデットであり、「ミス・サクリパン」とは、彼女があるオペレッタの中で演じた人物の名前であった。モデルの本質を完璧に描ききった、マネやホイッスラーの肖像画にも匹敵するこの水彩画を、しかし、エルスチールは、なぜ妻の目に触れさせないようにするのだろうか(II.205)。オデットがヴァリエテ座のレビューのためのコスチュームをまとった肖像画は、彼

が言うように、ただ当時の演劇の一個の資料としてのみ保存されているのだろうか。

ミス・サクリパンがオデットその人であるという発見は、当然、現在の巨匠エルスチールが実はかつてのヴェルデュラン家の俗悪な画家ビッシュだったという発見につながる。モデルの素性は又同時に画家の素性をも明らかにすることを気にしてエルスチールはこの絵について語りたがらないのか。あるいは、人生のこの時期そのものを思い出したくないのか。妻に対して隠したい何かがあるのか。アルベルチヌとの同棲生活とその破綻を経験した後の話者の解釈はバルベックの時とは少し異なる(IV.23-24)。うわさでは、エルスチールはオデットの愛人であった。画家であると同時に恋する男である画家の描く肖像はモデルに似ない。スワンにとってのオデット同様、あるいは、話者にとってのアルベルチヌ同様、男は他の人たちが見ることのないものを相手の中に見ているのであるから。その時、肖像が語るのは、「私が愛したもの、私を苦しめたもの、私がたえず見たもの、それがこれなのだ」ということである。オデットの肖像「ミス・サクリパン」が、このように、エルスチールのオデットに対する愛の諸要素から構成されたものであるなら、彼が妻の目からそれを隠そうというのも自然な感情と言うべきであろう。

かくして、オデットは表向きは女優のココットであった。『スワンの恋』の冒頭、スワンが旧友の一人からオデット・ド・クレシを紹介されるのが「劇場」であることは、すでに暗示的であった。それでは、紹介者の級友とは誰であったのか。それも、スワン亡き後、ヴェルデュラン家の会話で、シャルリュス男爵自らが事の経緯を語ることによって明らかとなる。彼ははっきり言っている。「彼女がミス・サクリパンを演じた夜、私は、半ば男装した彼女を魅力的だと思った」(III.803)。そして、男爵と同行の仲間

達は各自女優を一人ずつ、シャルリュスはオデットを、家につれ帰った。さらに続くシャルリュスの臆面もない告白によれば、彼はひたすら眠ることしか頭になかったのだが、うわさでは、彼はオデットと寝たことになってしまい、その日からオデットは何かと彼につきまとった。「ミス・サクリパンの肖像」に見られるバイ・セクシャルな魅力が男爵の嗜好と結びつくわけでもなく、又、スワンのアヴァンチュールへの期待に答えたわけでもなく、シャルリュスは、ただ単にオデットを厄介払いしたいがために彼女をスワンに紹介した。しかし、その後もオデットはシャルリュスから離れない。字が書けない彼女のために手紙の代筆をし（では、スワンを感動させた手紙も彼女が書いたのではなかった！）、散歩のお供をしてやり、乱交パーティーのお膳立てさえさせられていた。そして、オデットが持った愛人の名を淡々と列挙しながら、スワンが一途にオデットを愛していた時、彼女がどれほど彼を裏切っていたかを証明してみせる。スワンが受け取った匿名の卑劣な手紙の主は、ここに至って、シャルリュス以外の誰でもないことが明らかとなる。

話者がバルベックでエルスチールに所望して得られなかった「ミス・サクリパン」の写真は、又、後年、思いがけない経路をたどって、話者の手元に届く。大叔父アドルフが亡くなった翌年、大叔父の遺品として届けられた写真の中に「ミス・サクリパンの肖像」の1枚が含まれていたのである（II.563）。使いのモレルは、アドルフの従僕であった父の言葉として、この写真のドゥミ・モンデーヌ（高等娼婦）は、話者が最後に大叔父宅を訪問して出会った「バラ色服の婦人」であることを伝える。前述したように、話者は、この時初めて、「バラ色服の婦人」がオデットであったことを知るのである。

クレシ伯爵の妻

女優やココットと親交のあったアドルフ大叔父がオデットと知りあったのは、彼女がミス・サクリパンを演じる女優時代より以前にさかのぼる。即ち、オデットの前歴を知る上でアドルフは重要な鍵を握る人物と言える。では、アドルフと旧知のスワンはオデットの過去に関する彼の証言を得ることができるのか。ところで、スワンと知りあう前のオデットに関する情報の一つは、彼女がニースで浮名を流していたというものである。「セプテナ¹⁶⁾の最初の数年」、冬はニース、夏はバーデン・バーデンでバカンスを過ごすのが当時の流行であったが（I.308）、アドルフ大叔父も又冬をニースで過ごす一人だった。アドルフはニースでオデットと知りあったとスワンが推測するのは理由があったのである。オデットのニース時代の不品行の実態は彼を通じて明らかになる可能性がある。しかし、スワンは彼から説明を受けることはない。というのも、スワンは、オデットに絶大な影響力を持つアドルフに懇願して、スワンともっと会ってやってはどうかとオデットを説得させる工作を行うのだが、一筋縄ではいかないオデットは、スワンに対して、アドルフに手籠にされなかった、彼も普通のいやらしい男と変わりはないと嘘をつき、その嘘を信じたスワンは彼と絶交してしまっていたのである（I.307）。

ニースあるいはバーデン・バーデンで彼女がどんな生活を送っていたのか、誰かの囲われ者になっていたのか、具体的にどんな評判が立っていたのか、スワンはついにつきとめることができない。あるいは、オデットが肌身離さず身につける聖母のメダル、「彼女がニースに住んでいた時」彼女を大病から救ったラーゲのノートルダムへの信仰のエピソード（I.218）はどうか。この「彼女がニースに住んでいた時代」と言われる時代、これは、先ほどの、オデットが数カ月という一季節をニースへ過しに行った

「セプテナ」の時期を指しているのか。それとも、彼女にはニースに住んだ他の時期があったのか。結局、『スワンの恋』以前、「ミス・サクリパン」以前、ニースのオデット像は焦点を結ばないままなのである。

オデットのライトモチーフとなる英語の使用はどうであろう。「バラ色服の婦人」は、少年の話者に対して、《gentleman》、《a cup of tea》という英語を使っていた¹⁷⁾。あるいは、『スワンの恋』の幕開け、オデットは、ヴェルデュラン夫人に《fishing for compliments》など多くの英語を使っている (I.188)。パリのスワン邸では、英語を知らない話者が、スワン夫人の《studio》や《nurse》にとまどっている (I.499)。オデットのセリフにちりばめられた英語、彼女はこれらの英語を、国際保養都市、先ほどのニースやバーデン・バーデンで、外国の富豪を誘惑するために学んだのか。あるいは、英語を使う人物と同棲する間にそれを学びとったのか。それとも、ミス・サクリパンという奇妙な英語名の人物の役作りと関連があるのか。とにかく、英語の使用はオデットの不変の指標となっていて、オデットの代筆をする時のシャルリュスは抜かりなくそこに英語を交えている¹⁸⁾。

又、ある偶然の状況がオデットの知られざる過去へ接近する契機となる。ノルマンディー鉄道沿線のグラットヴァストでは、その名前からしていかにオデット・ド・クレシと因縁のありそうなクレシ伯爵、ピエール・ド・ヴェルジュ氏が列車に乗りこんでくる。この気品があり巧みに言葉をあやつる洗練された貴族が、なぜ、話者から夕食に招待されることを心待ちにするのか。いつも同じ粗末な着古した服で登場するこの人物は、かつては領主の生活の快適さを経験してきたのであり、彼の料理の注文の仕方、ワインの選択、貴族の系図に対する知識にそのことは十分うかがえる。では、年下の話者から食事と葉巻を供応されねばならないほどに

零落した理由は何であろうか。クレシの称号がイギリス起源であるとわかれ¹⁹⁾、そこには、自ずと、オデットの英語かぶれが重なる。彼は全財産をオデットに注ぎこんでしまったのではないか。彼女の英語はその名残ではないのか。クレシ氏も又英語を使うであろうか。しかし、彼に食事をおごる話者の方にそうした想像は働かない。彼の知るスワン夫人はオデット・ド・クレシという名のココットだったと彼に話したい誘惑に駆られるが、それは単にクレシ氏を興がらせようという動機からであって、それも冗談が過ぎると考えて話者は敢えて口に出すこともない。ずばり、オデットこそがクレシ伯爵のかつての妻であり、彼から最後の1サンチームまでしほり取ったと暴露するのはシャルリュス男爵である (III.805)。さらに、クレシ氏が金に困っているのは、スワンが生前彼に与えていた年金がストップしたからだとシャルリュスはつけ加える。こうして、かつてのオデットの像がまたひとつ結ばれたかのように見えるが、しかし、男爵の言っていることは真実なのであろうか。彼がオデットを知ったのはミス・サクリパンの時代である以上、それ以前の過去に属する事柄はオデット自身から直接聞く以外方法はない。が、非の打ちどころない貴族ぶりを発揮するクレシ氏がどこかの歓楽都市でオデットを見染めたというのだろうか。彼の古い城館があるのはノルマンディー鉄道沿線のアンカルヴィルでしかないというのに。むしろ、クレシ伯とオデットの結びつきに考えが至らなかった話者の鈍感さが正常なことで、ココットによって破産する大貴族のストーリーはシャルリュスのロマネスクな妄想によって生み出されたのではなかろうか。それに、オデットとの結婚後、スワンはどうやってクレシ氏を知り、なぜ、年金を与える必要があったのか。

ところで、『見いだされた時』の草稿に別なクレシが現れる (IV.768)。このいささか曖昧で奇

妙なくだりによると、オデットの嫁ぎ先の姓は、まさしく、クレシである。そして、彼女の最初の夫の名はジョン・ド・クレシという。シャルリュス男爵の親戚のクレシ (III.804)、あるいは、ゲルマント公爵夫人の姪が結婚したアメリカ人のシャルル・クレシ (III.471) 同様、オデットの最初の夫ジョン・ド・クレシは、バルベックの貧窮の大貴族クレシ伯爵、ピエール・セロール・ド・ヴェルジュとは何の関係もなさそうである。後年、オデットが話者に語って聞かせるアメリカへ渡った青年、激しく愛しあいながら出発の時にあって彼女が同行しないことになってしまう青年は (IV.598)、このクレシを脚色したものであろうか。オデットが語るオデットの遠い過去の物語はもはや真実とは思われないのである。

ま と め

スワン家のサロンに出入りを許された話者はスワン夫人に偶像崇拜的賛美を捧げている。華やかな色彩に色取られた彼女の衣装は彼に美の教育を施すかのようである。「モナリザがそこにあったとしても、スワン夫人の部屋着一枚ほどの喜びも与えなかったであろう。」 (I.518) 女性美の極致に達したかに見えるスワン夫人がそれまでにたどった人生のコースは、しかし、当然のことながら、若年の話者には明確に捉えられてはいない。とは言え、話者と彼女に接点が無かったわけではない。アドルフ大叔父の家で会った「バラ色服の婦人」、タンソンヴィルの「白い服の婦人」として、早くに、オデットは話者の前に姿を現していた。さらに、話者生前にさかのばれば、「スワンの恋」とそれ以前のオデットがいる。それら過去のオデットに共通するのは、第二帝政末期を生舞台とした一個のココット（高等娼婦）の姿である。しかし、ココットでない時に最も背徳的とみなされた「コンブレ」、ココットである時に最もココットにみ

えない「スワンの恋」、結婚してココットでなくなった時にもココットであった「スワン夫人」の時代、様々なオデット像を通じて明らかとなるのは、真実の捕えがたさということである。コンブレの人々は真相を知りえなかった。スワンもオデットの真実の姿を知りえなかった。スワン夫人の隠された行状は秘せられたままだ。「ミス・サクリパン」以前のオデットになれば、「ニースの時代」も「最初の夫」も虚実を識別できない。そうした彼女の遠い過去を復元しようと思えば、『スワンの恋』がそうであったような、彼女を次元の異なる時と場所においた新たな物語が必要となろう。それは、同一の人物が再登場して異なる生を提示するバルザックの『人間喜劇』に似たものとなるだろう。

パリで自らの美を最大限に開花させる、話者が身近に見るスワン夫人と、ココットとしてのオデットには断絶がある。客観的に見れば、オデットが使う英語と同様、常に変わらぬ不変の一個のオデット像が結べるかもしれない。が、話者の主観を通して見たオデットは、それぞれが他と内実を異にする別々の人格にみえる。また、そのようにオデットという人物像は造形されている。「バラ色服の婦人」、「白い服の婦人」、「ミス・サクリパン」、現在のスワン夫人、未来のオデット、それらは、ジョルジュ・プレがブルースト的空間について述べたとおりのもの、即ち、モナド、隔絶した宇宙なのである²⁰⁾。

ブルーストは、過去、現在、未来のオデットを通じて、ココットの社会的上昇の物語を描こうとしたのでは勿論ない。一個のココットをこれまで多様に変貌させる「時」こそが主人公なのである。彼女の孫、スワン家とゲルマント家を合体させた「時」の象徴としてのサン＝ルー嬢に劣らず、オデットも又、「時」の化身なのである。「時」が、人生が、「絶えず人と事件を神秘の糸で縊りあわせ、交差させる」 (IV.607)。かくして、ココットのオデットは最終的にゲル

マント公爵の愛人となり、公爵をだまし続けるのである。

注

- 1) Marcel Proust, *A la recherche du temps perdu*, Ed. Pléiade. 4vol. Tome I, p. 375. 以下、この版からの引用、参照箇所は本文中に巻数と頁数で示す。なお、訳は、筑摩書房版「プルースト全集」(井上究一郎訳)を参照しつつ拙訳した。
- 2) *Correspondance de Marcel Proust*, Tome XIII, Texte établi, présenté et annoté par Philip Kolb, pp. 25-26. さらに、ジャック・リヴィエール宛書簡でも同様の記述がある。「シャルリュス氏はオデットの愛人であるどころか、女性を嫌悪するホモセクシャルであり、スワンはそのことを知っている。」同巻 p. 99.
- 3) <Mais le plus grand plaisir que vous puissiez me faire, c'est d'aller plutôt voir Odette.> I.317
- 4) <Il avait fait venir le coiffeur de bonne heure parce qu'il avait écrit la veille à mon grand père qu'il était dans l'après-midi à Combray, ayant appris que Mme de Cambremer-Mlle Legrandin devait y passer quelques jours.> I.374
- 5) パリーコンブレの距離はどうか。ゲルマント公爵夫人はパリで何かがあると、日没時に城館を出発し、馬車を早駆けで走らせて、たそがれる森をぬけ大通りへ出て、それからコンブレで汽車に乗り換え、夜にはパリの集まりに姿を見せている (II.316)。コンブレから汽車に乗るスワンにとっては取るに足らない距離である。
- 6) コンブレの祖父母の家の一階には祖父の弟で退役軍人のアドルフの部屋があった。その部屋に何年も「私」が入っていないのは大叔父がもはやコンブレに来ないからで、その間の事情に関して、「私」は大いに責任がある、という風に回想が働いてエピソードが語られる。I.71 以下。
- 7) 「19世紀末葉のイギリス熱は、後に国王エドワード7世となるイギリス皇太子の度重なるパリ訪問が一役買っていた。」(I.1195の注)が、オデットの英語使用と世間の一般的风潮とは無縁であるようにみえる。
- 8) 少年を迎え入れたアドルフ邸の従僕の息子モレルは父の主人の遺品として女優たちの写真を話者に届ける。II.560 以下。
- 9) <[Elle lui (à Swann) faisait d'ailleurs des

scènes si continuelles qu'on pensait que] le jour où elle serait arrivée à ses fins et se serait fait épouser, rien ne la retiendra plus et que leur vie serait un enfer.> I.458

- 10) IV.976. Esquisse LXIX
- 11) Ibid.
- 12) <Ce qui serait gentil, ce serait de vous faire présenter à Mme Verdurin chez qui je vais tous les soirs. Croyez-vous! Si on s'y retrouvait et si je pensais que c'est un peu pour moi que vous y êtes!> I.196
- 13) どんなにノックしても開かなかった扉が、1時間後には開かれ(オデットは寝ていた!), 退散しようとするれば激しく引きとめられ、その間に玄関が閉まり、遠ざかる馬車の音が聞こえたある日のエピソード。I.273 以下。
- 14) <Un jour il (Swann) reçut une lettre anonyme, qui lui disait qu'Odette avait été la maîtresse d'innombrables hommes……de femmes, et qu'elle fréquentait les maisons de passe.> I.350. オデットは無数の男たちの、そして、女たちの愛人だった。
- 15) <……le talent avec lequel elle jouerait son rôle avait sans doute moins d'importance que l'attrait irritant qu'elle allait offrir aux sens blasés ou dépravés de certains spectateurs……> II.204
- 16) Septennat. フランス大統領の7年の任期。注によると (I.1228), 1873年に始まるマク=マオン大統領の任期を指す。
- 17) 本論 p. 35
- 18) スワンに紹介された数日後にオデットが書く(シャルリュスが代筆する)手紙。<(ce quartier) qui était si peu smart pour lui qui l'était tant>「あれほどスマートな彼にとってあんなにもスマートでないところの(あの界限)」このしゃれた一節は、英語の表現によって、ココットの洗練を示す効果を生んでいる (I.193)。
- 19) <……j'appris qu'elle (la famille de Crécy) était très grande et un authentique rameau détaché en France de la famille anglaise qui porte le titre de Crécy.> III.471
- 20) <Les lieux sont des îles dans l'espace, des monads, de "petits univers à part"> Georges Poulet, *L'espace proustien*, Gallimard 1982 (初版 1963), p. 51. 場所と空間の定義は人物と時間にもあてはまる。